

# はつの祖母の思い出



菜園場のハツノ祖母

口述 石田はつの  
編集 森野奥人



# 目次

はじめに	
はじめに . . . . .	3
ご先祖のこと . . . . .	6
ハツノ祖母の幼児期から娘時代のこと	
幼児時代 . . . . .	11
浦崎の小学校時代 . . . . .	13
藤江の小学校時代 . . . . .	15
弟の仇討ち . . . . .	17
千光寺、花見の過 . . . . .	19
校長先生の思いやり . . . . .	21
卒業後、仕事、習い事 . . . . .	23
文明開化の話 . . . . .	25
ハツノ祖母の誇り・梁吉祖父のこと	
梁吉祖父の還暦祝い . . . . .	29
高田新四郎氏の成功 . . . . .	31
希代の知恵者 . . . . .	34
国会議員、井上角五郎先生 . . . . .	36
保助大祖父 . . . . .	39
奥付	
奥付 . . . . .	45



はじめに



はじめに



S 5 rFQwTjMDZ 3 F r g 1 6 9 5 3 4 0 6 4 1 \

口述 石田はつの (文中、私と表現しています)

聞き取りと筆記 孫の森野奥人 () 内は森野奥人の注釈

私 (はつの) の近しきご先祖には、それはまれにしか見ない人徳者が居りました。

その第一の人は、私の祖父・梁吉でありました。

世の中には、自分のためだけに生きている多くの人と、自分のことはさて置き、人のために生きている少数の人が居るようです。

祖父は、後の部類の人であり、その難しい仕事を、人一倍すぐれた知恵で実現していった人でした。

私にとって、このような人を先祖にもっていることがどれほど誇りになり、どれほど勇気づけられたかわかりません。

祖父は、「はっちゃんよ。

人間は一代のうちにどんな事も有るだろうけれども、その日の日暮しもできん貧乏人になったとしても、心だけは落ちぶれるなよ」と言われたことがありました。

私の人生は、確かにその日暮しにも事欠く、どん底の一生になりましたが、心だけはきれいなままで過ごしてきたことを、今になって誇らしく思っています。

祖父は、あまり笑うことをしない威厳ある風貌の人でしたが、こちらから何かを聞いたら、大概のことは教えてくれました。

従兄弟の誰もあえて聞こうとはしなかったから、いま祖父のしてきた事について知っているのは、自分だけになってしまいました。

祖父は、名を池田梁吉と申します。

以前、テレビのNHKでやっていた大河ドラマ「西郷隆盛 (翔ぶが如く)」に出てくる大久保利通 (鹿賀丈史) のような威厳のある風貌をしていました。

写真が割合普及していた頃だったのですが、祖父は写真を撮られると魂を抜かれると信じていたので、一枚の写真も残っていません。

有るのは、妻のたけ祖母と伯父、伯母がともに映っているときのものだけ。

それで、大久保利通がテレビに映るつど、いつしか娘時代の思い出に耽ってしまいました。

ドラマの筋は、そのつどわからなくなりましたが。



## ご先祖のこと

私はむかし人間のためか、どうしても誇らしくなるのは、池田家の家柄です。姫路城主であった池田輝正公の御曹子が、福山城にご養子として迎えられたとき、若様のお守役として随行したのが、わが池田家の先祖であるといいます。若様が備後藩福山城主となられてから、この家は城代家老職を代々勤めて、明治維新まで続きました。輝正公と同じ姓であることは、多分に本家分家の関係であったかも知れませんが、時のご先祖の幾代かの名とともに、今は霧の中です。

私は、最近になってその場所を調べてみたところ、明治時代になって鉄道が敷かれたことにより、城が駅に切り取られてしまったため、城代家老の屋敷は今の福山駅の中ほどになることがわかりました。城代家老は、明治には黒金屋という屋号を持つ商人となりました。今でも登城する石段の先に、黒金御門という城門がありますが、これは黒金屋が寄進したものといます。私は先祖のした功業を前に、しばらく佇んでいました。

池田梁吉のそのまた祖父は、その家柄の分家筋でありました。明治維新以前に武士階級を嫌っていち早く平民となり、備後は沼隈郡、千年村の庄屋となりました。つい私の代まで、城を守ってきた者の子孫すべてに対して、先祖代々の系図に調印させるようなこともありましたが、実際に調印したのは祖父の代までだったようです。

次は池田梁吉のそのまた祖父にまつわる話です。庄屋になっていくらか後の天保年間に大飢饉が起り、天保六年にその頂点を迎えました。この飢饉は、天保の大飢饉として知られるもので、金が有っても食べ物が手に入らず、金の入った布袋を首に掛けたまま行き倒れる人が、巷に溢れたといいます。

このとき、農村部で裕福なのは米蔵に多くの米を貯えた庄屋だけで、普通の百姓家が口にできるものはほとんどありませんでした。

このため、庄屋邸の焼き討ち事件が日本全土で起こったといえます。

だが、先代の祖父は、庄屋の一般に似合わず、すでに飢饉が始まった頃から、千年村の百姓家の暮らしぶりをみて、それに応じて蔵の貯えを村民に分け与えていました。

特にこの天保六年ばかりは、飢饉の度合いがきわめてひどかったので、貯えをすべて取り崩し、米一俵、麦一俵を一家の割りで村中に配り、「普段は、引き割り粥（米、麦、その他を白で糠いて粉にしてお粥にしたもの）を作り、祭りの時だけ米を食べて、今年一年を何とか繋いでおくれ」とまで言い渡していました。

このため、千年村内での騒動はありませんでした。

ところが、沼隈郡の各所で発生した焼き討ちは、千年村にも及んできました。

竹槍や箆を手にした徒党が、まっしぐらに梁吉の祖父の屋敷目掛けてやってきたのです。

ところが、尋常ではないことが起きたものです。

焼き討ちのあることをいち早く知った村の衆が、竹槍などを手にして庄屋邸を背に取り巻いて、やってきた徒党を逆に説得したのです。

こうして事件は何事もなく済んだのでした。

沼隈郡十六ヶ村のうち、焼き討ちを免れたのは二ヶ村だけだったといえます。

事はそればかりではありません。

村の衆は、それからというものの毎年のように総出で、先代の広い田の田植え、稲刈りなどの農作業を手伝ってくれ、その恩返しは梁吉の代に至る明治以降にまで及んだのです。世代が替わっても、恩義を忘れず行なわれていた総出の手伝いを見て心苦しく思った梁吉祖父は、「わずか数年の、それも当たり前のことでした恩に、何十年も報いてくれているのでは申し訳ない」と言って、広い田畑を売り、かわりに七山と七艘の黒船（3、4人乗りの帆船。当時はそのように呼んでいたようである）を買い、それをもとに海運事業を始めました。

私の父、神原国助は、若い頃からこのときの一艘の船に乗り、船長として台湾の高尾やキールンから朝鮮の釜山まで、石材を運搬しました。

その後、尾道と大阪の間を行き来するようになり、私が十五才頃には、船乗り二人が徴兵に取られたために、父とともに海に出て仕事をしました。

私は船室甲板の掃除、炊事、食料や水の買い出し、船乗りのする帆かけ、舵取りまで一通りをこなしました。

さて、池田梁吉のもとに嫁にきたのが、たけ祖母です。

この人は、三原藩の槍一筋の家柄の娘で、かつては「たけや姫」と呼ばれていました。お嫁にきた当初、台所の女中さんが「若奥様、今夜は何のおかずにしましょうか」と聞くと、「よきにはからいなさい」と答えられたので、近所でも評判になったといひます。お姫様だったので、炊事を一切しなかったのだそうです。

私には、常に上品で優しいお祖母様だったと思ひ出されます。

正月二日には、色紙の短冊に歌を書き、欄間の額の中に、もみじに鹿の刺繍などを施されました。

私は、この梁吉夫妻に、生まれてから五才になる頃まで育てられました。

というのは、私が生まれてすぐに、父の国助が腸チフスに罹り、再発を繰り返して、数年に及ぶ隔離生活を余儀なくされたからです。

私が兄弟、従兄のだれよりも可愛がられたのは、おしめの取り替えからご飯の世話までしてもらった機縁によるところが大きいようです。

私は、その祖父と祖母に手を引かれて、近くのお寺にしばしば説法を聞きにいきました。この時の周りの景色の思ひ出や、よくわからなかったにせよ、仏様の話などを聞いてきた美しい思ひ出が三つ子の心として残り、その後のおおかたの難渋に満ちた人生を、愚れたり投げやりになつたりしないで過ごせたように思ひます。

ハツノ祖母の幼児期から娘時代のこと



## 幼児時代

父国助と母ユキは、結婚したのですが、一年も経たないうちに離婚して、母は実家である千年村大越に帰ってきて、私を生みました。

私の誕生日は、いま戸籍上では明治三十六年の八月二十二日となっていますが、本当は旧暦の五月二十二日だと聞かされました。

しかも、最初は、伯父の直吉の三女として届けられていました。

当時は運勢学上の問題とか、早死にを案じてのゆえに、出生日の後送りがよくなされたらしいのですが、私の場合は夫婦間のごたごたが最大の原因だったでしょうし、また母からすれば、私はそう大事な人間ではなかったからかも知れません。

その後、まわりのとりなしで、父母は復縁しました。

その経緯は私もよくわかりませんが、父の国助がその頃腸チフスに罹り、再発を繰り返して、都合二年の隔離を含む入院生活を送った際に、母は付き添っていたと聞きます。

そうしたことのため、私は祖父母に、生まれてから五つになるまで育てられました。

この時のことは、幸せだったせいかよく憶えていません。

父が退院すると、私は祖父の手元を離れ、一つ離れた浦崎村高尾の実家に帰りました。

私は、知る由もないことですが、すでに二才になる章という弟があり、母は自分の体が弱かったので、おぶって守りをするよう命じました。

そんなに弟と背丈が違うわけでもないのに弟の足が地をすり、あまりの重さに私の脚もふらつきましたが、一生懸命に頑張りました。

転けて泣かそうものなら、母は怒鳴りつけたあげく、ひどく叩きなざったからです。

弟の子守は、毎日朝から日が暮れるまで続きました。

そのためか、私の背は人並みに伸びなかったようです。

また、早朝には牛追いの仕事がありました。

家で耕作用の牛を一頭飼っていて、それに食事させるのが、朝起きなりからの仕事でした。

どれほどの背丈もないわずか五、六才の頃のこと、裏山に追っていく途中で、牛は立ち止まって勝手に道草を食べるので、それを前に進めるために、手綱で自分の頭よりも高いところにある牛のお尻を叩いていきました。

山と山の間の谷にある草地で牛に食べさせている間、私は木登りをしました。  
松の木に登ると、枝の上に鳥の糞などを土にして知らない草が咲き、たくさんの米粒ほどの実をつけていました。  
牛は草を食べて満足でも、まだ私は朝飯前で空腹だったため、取って食べてみると、不思議な美味しい味がしたので、たくさん食べたのを憶えています。

## 浦崎の小学校時代

明治四十三年の春、私は浦崎村の尋常小学校に入学しました。

それは、辛い子守の仕事から解放されることであり、子供ならではの自由を満喫できた幸せな時期でした。

小学一、二年の頃、明治天皇のご病氣平癒のため、毎日のように学校から1キロほど離れた住吉神社に、二列の隊列をつくり詣りました。

天皇様には申し訳ないですが、何が良い悪いの区別もつかぬ時期だったので、たいへん楽しいことでした。

学校とは何と良いものかと思ったことでしょう。

休みの日になると、私はしばしば二里離れた梁吉祖父の住む千年村大越に行きました。

祖父の畑や裏山で取れる季節に応じた野菜や果物、木の実などを取らせてもらっていましたが、あるとき、それらの取れる時期を聞いてくるように、使い走りを母から言い付かることができました。

道すがらの道脇に小さいが早い水の流れがあって、その土手を蟻の行列が長い列を作っていました。

ふと足を止め、それをぼおっと見ているうちに、自分が何の使いをしているのか忘れてしまったのです。

大越に着いたら、祖母が林檎や上菓子を出してもてなしてくれました。

そして、いろんな話をして楽しいときを過ごしましたが、いざ何の用事で来たか思い出そうとすると、蟻の行列が思い浮かぶだけで、とうとうそのまま大越をあとにしてしまいました。

家に帰り、母に首尾を報告する段になり、「私は何を聞いてきたらよかったんでしょう」と覚悟を決めて言うと、母は「何のためにいっとったんだ」と怒鳴るや、台所から割り木を持ってきて背中を散々叩きました。

それ以来、使い走りの用件を忘れた試しはありません。

また、この頃、梁吉祖父の父である保助大祖父が、よく遊んでくれました。

保助大祖父もまた、先代の人徳を引き継いだ人でした。

私が帰るときになると、私を母の家の見えるところまで送ってくれるのがしばしばでした。

あるときなど、私は大祖父と歩いているうちに眠たくなって、道端にしゃがみこんで寝てしまいます。

大祖父は、「おお、眠うなったか。わしがおぶって行ってやろう」と、私をおぶって、いつものところまで来ると、

「はっちゃんや。さあ着いたで、ここからは自分で帰りなさい」と起こしてくれました。大越は本当に居心地が良かった。

帰りがけに雨が降ったりすると、梁吉祖父は翌朝帰るように言ってくれました。

それが時には、二日後になることもありましたが、こうしたときにも祖父が母あての伝言を家人に持たせますと、母は何も怒りませんでした。

母も祖父を誇りにしていたから、決して逆らわなかったのです。

今の方なら、どうして祖父に母のきつい仕打ちを打ち明けて、諫めてもらわないのかと言われるかも知れません。

でも、その家に居るものが、その家の恥を世間に曝すというようなことは、その当時どこにも例がありませんでしたし、また母とはそういう厳しいものだとも思っておりました。

## 藤江の小学校時代

大正元年、私が小学三年の時に、父の仕事の都合で隣村の藤江村前の浜に家を建てて移りました。

父は、今度は藤江のハトから尾道通いの渡海をやりだしたのです。

船の名前はハト丸といい、毎朝大勢の人を乗せて尾道へ出航します。

私は、家から五百米ほどある藤江村小学校に転入しました。

母は、前の年に生まれた弟、忠の産後の日立ちが悪く、ひどい喘息の病になって、春の木の芽立ち、秋の草枯れどきには何ヵ月間も何もできませんでした。

そこで、私が炊事、洗濯、食べごしらえをしました。

また、弟の忠は乳飲み子ゆえ仕方ないとしても、章の面倒は私の責任となり、学校に連れていくこととなりました。

私は二人が並んで座る長椅子長机の、隣の子との間に弟の章を置いて勉強しました。

そんなことをしていたのは私だけでしたが、級友のだれもからかったり不平を言うものはなく、先生がたも普通と変わらぬ授業をして下さいました。

中でも校長先生は、弟と私をよく授業の合間にやさしくいたわって下さいました。

大正天皇の御大典に、日本全国が賑わったころのことです。

天皇の御神影が小学校に配布になり、講堂の宝殿に安置されました。

それを祝して祭りが催され、小学校の運動場で、大勢の人が集まり、磯節の踊りの輪ができたのです。

私もこの時、紫のちりめんで頬冠りして踊っていました。

ところが、突然私の振り上げた両手をそのまま掴んで放さない人がいたのです。

振りほどこうと思っても、私の力ではどうしようもなく、ふと見ると、それは校長先生でした。

しばらくそんな状態が続いたので、周りの人は気付いて見ます。

恥ずかしいことでした。

後になって思うと、校長先生はいろんな方法で私の存在を引き立たせようとしていたことがわかります。

私が家庭の事情で苦勞をしていることが解っておられたからでしょう。

私は運動神経だけは達者でした。

運動会の走りでは、たいがい一等賞をとり、賞品として鉛筆一ダースや半紙一束（百枚）をもらいました。

実力もあるにはありましたが、裏話がないわけでもなく、運動場を一周する競争では、いつでもいちばん内側に並びました。

この仕掛けを見破った藤本トラさんや神谷さんやらが、「神原さんはいつも内側からスタートして、ずるいです」と校長先生に嘸み付いたのですが、そのつど先生は「いちばん小さいんじゃで、辛抱したれ」と不平分子をかわして下さいました。

私は、運動会の賞品もそうでしたが、祖父からお年玉として半紙を一束頂いたりもしました。

でも、それらすべて母に取り上げられてしまい、そのくせ書き方の時間のある日には、半紙一枚しか都合してもらえなかったのです。

他の子等は、書き直しがきくよう何枚も予備を持ってきていたのですが。

授業では、一つの手本が課題として出されました。

時間内に手本にできるだけ近い上手な作品を提出すればよかったので、一枚で足りるといえば足りるのですが、まだ小さな子供にとって、難しいことではなかったでしょうか。このため図らずも、私には手本どおりに間違わず書く癖がつき、常に書き方では一番の成績となったのです。

学芸会でも、書き方の模範生の発表の場があり、講堂のいちばん前の教壇の前に座って、硯と半紙を前にして筆を取って、実地に書いて見せました。

何が幸いするかわからないものです。

誇らしいことでした。

ただ、授業中に使う鉛筆だけは困りました。

小さくちびて2センチぐらいになっても、かぶせを接いで使わされました。

間違っって芯を折って帰ったりしたら、どんなことになったか。

私は学級委員長などにはならなかったけれど、いろんな事で先生方には印象深かったでしょう。

学芸会では、主役を演じることが多く、とくに木曾義仲の育ての親、斉藤実盛役は私にとって忘れられない思い出です。

小さい頃はとかくいろんな脱線や失敗をしたものですが、とくに印象深かったことを二つ挙げましょう。

## 弟の仇討ち

私は殻は小さかったのですが、けんかをして運動神経のよさから、相手が男の子といえどもほとんど負けたことはありません。

とくに相手がずるくて悪い場合には、徹底的にやっつけてやりました。

私は高学年に上がって、三つ違いの章も低学年に上がってきました。

その頃、仙一という、弱い者いじめをする子がいて、章はいつもいじめられていたのです。

章が泣いて帰った明るる日の朝、私は学校に登校すると章の仇討ちをすべく下駄箱の脇で仙一を待ちました。

やがて仙一が現われ、草履を脱ぐと自分の下駄箱から上履きを取り出して、代わりに入れようと向うを向いた瞬間、私は飛び出して、仙一の後ろから耳を掴んでやりました。

「うわ、何するんじゃ。そんなことしたら、ひどいことどつくぞ」

私はひるみもせず、「おお、やってみい。そんなことしたら、耳を引きちぎるぞ」と、少し両手にひねりを入れました。

「いててて」

「章をよういじめてくれた。これはそのお返しじゃ。もうせんのじゃったら放してやるが、どうじゃ」

よほど痛かったのでしょう。

仙一は「解った、解った。もう二度とせん」と約束しました。

「よし、それなら許しちゃう」と手を放したら、仙一は男のくせに耳を押さえてしくしく泣きだしてしまいました。

そのとき、廊下のほうから、宮沢先生が走ってきて、「こら、何しとるんじゃ。男の子を泣かすとは」とあきれ顔。

騒ぎを見ていた同級生が職員室の先生に、「女子のハツノさんが、男子の迫田仙一をいじめています」とご注進に行ったものでした。

職員室に立たされました。

当時、男子の間ならともかくも、女子が男子をいじめるなどということは、有ってはならないことでした。

そのうち、お昼になり、生徒は持参した弁当を食べるか、家に帰って食事してくるようになっていました。

私は、いつも帰っていたので、このまま立たされたままならば、母がまた怒るに違いないと、内心そわそわしていました。

そこに校長先生がやってきました。

「ご飯、食べに帰るのか」「そうです」

校長先生は、こちらのほうを困り顔で見ている宮沢先生をちらりと見て言われました。

「宮沢先生と、お母さんとどっちが怖い」「それは、お母さんです」「どうして」

「先生は叱っても叩かんですが、お母さんは叩くから怖いです」

すると、校長先生はうなずいて、「食べに帰ってこいよ」と言われました。

助かった。

先生に会釈して、家に走って帰りました。

食べてもどり、また職員室に立っていると、次の授業が始まる頃、宮沢先生が「もう教室に帰ってこい」と言ってこられました。

## 千光寺、花見の過

幼い時の思い出は辛いことばかりではありません。

月に二日くらい休みの日があって、友達と一緒に山へ行ってかくれんぼしたり、ガンの実採りやハツタケ採りやショーロ探しに夢中になって楽しい一日を過ごしたことなど。

でも、友達といっても、名はニンヤのトラさん、ツジのヨッさん、それにマモルさんといった男の子ばかりでした。

女の私も男の子に負けないはずら者で、かくれんぼの時などは松の木のとっぺんまで登って、下のほうで一生懸命探す友達の有様を見て楽しんだりしました。

五年生の春終り頃、尾道への遠足があって、千光寺へ登りました。

そこには、サクランボがたわわになっていました。

昼食後、友達が下枝付近のサクランボを食べておいしいと言ったので、私は高いところのほうがもっとおいしいと思い、桜の木に登りました。

すると、下から友達が「神原。ぼって落としてくれ」と言うので、気のいい私はどんどん落としてやったのです。

ところが、明るる朝、二時間目が終わった頃に先生が、「昨日尾道でサクランボをぼって食べた者、全員廊下に立て」と言いました。

言いつけを守って食べなかった級長を除いて生徒全員が立ちました。

先生からは、千光寺の桜守が怒って来ていると聞かされました。

お昼になっても食事をさせてくれませんので、私は家へ帰って食べなければ困ると思い、「私は家に食べに帰ってくる」と言ったら、生徒は皆「そんなことをしたら先生に叱られる」と言い、中には泣き出す人もいました。

でも、とうとう私も、僕も帰ろうと言い出し、しまいには全員帰りたいと言い出しました。

そこで私は、「なら、みんな帰れ。残ると先生に叱られるだけだから、みんな帰れ」とそそのかしました。

こうして集団脱走となったのです。

みんなで校門を出ようとする、先生がそれを見付け「おい、待て待て」と言って走ってきました。

私は、「後戻りしたらひどく叱られるだけだから、早よ帰れ」と怒鳴りました。

こうしてみんな帰ってしまいました。

明るく朝の朝礼の時、遠足に連れて行った引率の先生三人が辞職のあいさつをされました。

学校の裁定は、先生が十分注意しなかったことが悪かったというのです。

## 校長先生の思いやり

学校は楽しかったけれど、家に帰れば家の仕事がいくらでもありました。

とくに春と秋は母が寝たきりになりました。

そこで、一日の日課は、朝四時半までに起きて夜が明けるまでに食事ごしらえ、拭き掃除して、海岸に行っておむつ洗いして水で濯いで干します。

それから隣の庭先から水汲みに行って、大きな水瓶にいっぱい汲んでおき、朝ご飯を食べながら、弟の着物を着せ、履物の用意をして、私のこしらえをして学校に行きます。

畑仕事も、秋は麦まき、冬は麦踏み、夏になれば麦刈りとなかなか忙しいのです。

畑は二か所にわかれて一反歩ほどありましたが、私一人でサツマイモを植え、収穫時にはそれを掘り出して担いで家に運び入れ、床下にこしらえた一間半くらいの芋壺に二百貫目ほど入れて保存し、それを一家の毎日の主食にしました。

夕方は一家の食事の用意をし、日暮時になると父の船が戻ってくるので、一緒に荷上げして車で藤江の商店に運びました。

そして、父と私の夕食はいつも九時頃になりました。

そういうわけで、じっとしている授業中は、眠くて眠くて仕方ありません。

他の先生のとときは、あまりしなかったのですが、校長先生の理科の時間中には、疲れていたのでも寝の前に本を立ててよく昼寝をしました。

でも、校長先生は、私の苦勞をわかっていて、いつも見て見ぬふりをして下さいました。だから、理科の授業にはほとんど身が入らなかったのですが、ある日こんなことがありました。

休憩時間中に、校長先生が運動場にわざわざ呼びにきて、「はっちゃん、ちょっときなさい」とおっしゃる。

何かと思い、付いていくと、「花壇の隅に、芽が出ているから見てくれ」とおっしゃる。空豆の芽で、抜いてみてもよいというのです。

「はあ、そうですか」と抜くと、これは何でどういうものを説明して下さり、その時は終わったのでした。

ところが、すぐ後の理科の時間に、校長先生は教壇に立つやいなや、黒板に先ほどの見た空豆の芽の絵を上手に書かれたのです。

そして「誰か、これがわかる者はいるか」と生徒たちにおっしゃいます。

他の生徒が首をかしげている中で、根が単純な私は、思わず手を挙げてしまい、「先生。それは空豆です」と大声で答えました。

すると、「おお、ようわかった」と皆の前で誉めて下さいました。

こんなことがよくあり、おかげで私はだんだん理科が好きになり、野菜作りが好きになりました。

いま、畑作りが得意なのは、そのためなのです。

校長先生は、御芳名を桧垣忠三郎といい、後に神助の功労者として、昭和天皇の拝謁を賜り、表彰を受けられました。

文部省から松永の高等女学院の校長職を勧められましたが辞退され、一小村の小学校の校長を通されました。

後に地元の愛媛県の大島に帰られて、八十一歳か、八十二歳でなくなられました。

私は、昭和三十年代のいつだったか、墓参りに行かせて頂きました。

先生がなくなられて、八年の後でした。

墓はほころとなっており、賽銭が捧げられていて、参拝者が絶えないのか、二本の花立てには一番新しい花が供えられ、周りにはやや古くなった花がたくさん置かれていました。

ここで、悲しい話を一つしておきましょう。

私が十才の頃、母はふきよという初めての妹を生みました。

一つになる頃、疱瘡の接種をしたその日に熱を出し、不思議なことに、蒸かし終えた薩摩芋を持ち上げると、背に負うようにして、はいはいをしながら、家の心柱（大黒柱）の周りを何回も何回も巡るのです。

芋を落としては乗せることを繰り返しながら。

そして、翌日あっけなく死んでしまいました。

幼くして死ぬ者は、自分の身に起こる不幸を察知して、最後にこの世に対してできるだけ奉公をしようとするものようです。

その哀れさが当時の私にもひとしお理解できて、私は学校と家との行き来の途中で、ふきよの墓に立ち寄って手を合わせ、「ふきちゃんよう、かわいそうに、どうして死んでしまっただいや」と、石壇に顔をすり寄せて泣いたのでした。

## 卒業後、仕事、習い事

私が小学校を出た年、次女の百合子が生まれました。

母はまた育児にかかりきりとなりましたから、私は替わって家の作業場に備え付けられた織機の前に座って、畳の上に敷く上敷き織りの仕事をしました。

ちょうど反物を織る機織機の要領ですが、四寸半の間に七百五十本のいぐさが入るように織り合わせていくのです。

それを朝の四時から、夜の九時過ぎまで織り続けて、一日六間以上の上敷きを織り上げるのが日課でした。

それも合間に畑仕事や家事の手伝いをやりながらでした。

そして、一枚の上敷きの長さ二十一間三尺を三日間で織り上げないと、ひどく叱られ、ときには夕食を食べさせてもらえないこともありました。

十九才で嫁ぐまでの間、年がら年じゅう仕事に明け暮れていましたが、何のお稽古事もできなかったかという、そんなことはありません。

小学校を卒業して、一年ほど後のこと、校長先生が、暇のない子供らのために自宅で夜学を開くことにしたので、来るよう言ってこられました。

それで、私も自分の仕事が終わってから、小学校に隣接していた先生宅へ行き、何人かの生徒に混じって手紙の書き方と算盤を習いました。

手紙の練習は、将来みな困らぬようにとの、先生の配慮からでした。

算盤は足算、引算、掛算、割算を習いましたが、今憶えているのは、よく使うことのあった足算、引算だけになってしまいました。

また、たしなみとして、百人一首を教えてください、正月の時などは、かますに三袋もの蜜柑をかけて、みんなと取り合いをして楽しんだものでした。

これは、二年間ほどのことでした。

夜学にいる間に、ひどい嵐になったことがありました。

そうしたことは二度ばかりあったのですが、校長先生は、危ないから泊まっていきなさいと、私の家のほうに電話を入れておいて下さいました。

二階の部屋で、先生と奥さんの間で寝かせてもらいました。

翌朝起きると、先生も奥さんも居らず、時間も経っていてあわてましたが、後から思うと、たまには寝坊しなさいという先生の思いやりだったようです。

電話といましたが、むろん私の家にあったわけではありません。

前の浜の家並みは、三十軒ほどの家が、向かい合うようにして軒を並べており、そのいちばん角の大きな家が、大本さんという県会議員さんの家で、そこだけに電話が引かれていました。

少し離れてはいましたが、この界限の人あてに電話があるたびに、大本さんの家人が気よく駆け回ってくれていたのです。

また、私の家の裏に、伊勢さんという学校の先生をしていたお姉さんがいて、時折、琴やテニスを私に教えてくれました。

こうして私は、結構何でも一通りやってきたのです。

やがて、伊勢さんは、大本さんのところに嫁入りされました。

私は水泳もしましたが、あまりぱっとしない思い出が残っています。

前の浜とは地名ですが、まさにその通りで、前の家を隔てた向こうが浜辺で、父の船も一艚置いてありました。

夏の暑い盛り、私は、泳ぎたくてたまらないときが何度もありました。

でも、母はなかなか許してくれず、せがんでようやく「十五分だけならよい」という許しをもらいました。

浜辺に飛んで出ましたが、当時は着物、帯、襦袢と色々着込んでいたから、どんなに急いでも脱ぐのに五分はかかりました。

むろん着るのは、それ以上かかったはずです。

私は、急いで停めてあった船の艀から飛び込み、十メートルほど向こうにある碇のところに行き、碇綱を持って戻りかけると、時間を押し量ったように母が百合子を抱いて岸壁に立って待っている姿があり、「はよう上がってこい」と叫んでいました。

いつもこんな調子だったから、海辺に育ったとはいえ、水泳が不得手で、未だに犬掻きしかできないでおります。

## 文明開化の話

私が上敷き織りをしていた頃に起きた出来事です。

昼間はよいが、夜間は、はじめのころ石油ランプで明かりを採っていました。

それは、芯を置く皿が金物のため、周囲こそ明るいですが、真下が暗かったのです。

私が十四才になったとき、松永から沼隈郡一带に電気がきました。

貧しい家ではたいがい、十燭光の電灯がともされました。

それは、今からすると、便所で頼りなく灯る電灯ほどに暗いものでしたが、ランプの不便さよりははるかに良いもののように思えました。

油が切れることもないし、真下も明るかったからです。

裕福な家庭は別として、普通はどこでも電灯が一つで、夕方暗くなるとそれをともし、夕飯のときはそれを居間に移動してみな集まって食事し、お客が来れば客間に運んでみなでお相手し、仕事のときは仕事場の織機の上に吊して、このときばかりは仕事する私の専用となりました。

どの部屋にでも持運びができるよう、電線は十分長くとっていたのです。

しかし、えらく便利なものが出来たものです。

ランプなら、その日予定した分量の石油が尽きれば、それで仕事も終わったのですが、一度つけたら最後、一晩中ともっているものだから、どこの家でもてっきりそれに合わせるものだと思ってしまったようです。

私の家では、夜の十二時までは誰が、十二時から朝までは誰が、という具合に、交替で仕事をするようになりましたし、松永のどこでもおよそそんなふうで、一晩中小さな明かりのともっている光景があちこちで観られたはずでした。

ところが、半年もすると、どこの家から言い出したものか、電灯というものは一晩中つけていなくても良いという噂が、たぶん町の寄り合い場あたりから広まったようです。

やがてどこの家庭も、元のやり方に戻していったのでした。

こうして、どこの家庭でも、電気革命は始まったと思います。

そして、すぐに二十燭光になり、また四十燭光へと換わっていきました。

また、大正天皇の御大典を祝して、アメリカからはるばるスミス飛行士が飛行機でやっ

てきて、下関から汽車の線路に沿って東京まで飛行して見せなさいということで、巷はその噂で持ちきりになったことがありました。

だいたい、飛行機自体誰も見たことがなく、凶鑑か何かでこんなものだというぐらいしかわかっていなかった時分のことです。

その日は朝から近所の人たちが、普段外へ出ない人も含めてせわしく表へ出ては空を見上げて、「いつくるんやろ」とか「まだこんようやな」とか話をするので、ふだん静かな空もざわめいていました。

珍しいことなので、私も上敷き織りの仕事を一仕切りやっちは、外へ出て空を眺めてみるということを、何度も繰り返していました。

だが、いつまでたっても来る気配はないので、昼も回ってからは半ばあきらめて仕事に専念していますと、三時を回った頃です。

外が急に騒がしくなりました。

隣の奥さんがわめきながら、うちに来ました。

「来たよ。来たよ。早うせんと行ってしまおうよ」と。

急いで外へ出て皆のしている方角の空を眺めてみると、居た居た、ちょうど蚊とんぼくらの大きさが去っていくではありませんか。

すぐにそれは、雲の中に見えなくなりました。

こうして娘じぶんには物珍しさで遠めに見た飛行機でしたが、太平洋戦争期には栗田（京都府宮津市）の航空隊で毎日のように間近に見ることになったのです。

ハツノ祖母の誇り・梁吉祖父のこと



## 梁吉祖父の還暦祝い

私が十五才のとき、池田梁吉祖父の還暦のお祝いがあり、祖父からその席での客のもてなし係を務めてくれるよう言われました。

宴席は、六畳間三つの仕切りを取って並べた大広間に、祖父を中央にして、左右に一列ずつ、お膳がきれいに並べられていました。

お祝いの初日に、その左右の座に座っていたのは、羽織り袴か、もしくは新来の背広上下に身を包み、髭をたくわえ、手にはパイプを持った貫禄ある紳士ばかりでした。

それもそのはず、沼隈郡の郡長、千年村の村長、村会議員、学校長など主立った面々が、威儀を正して座をしめていたのです。

私の見知った顔も、いくつもありました。

宴会が始まると、私は隣村の校長先生と共に、お酒の給仕をしました。

初めてのことで、校長先生の見よう見真似でお客様の一人一人にお酒をついで回ったのです。

ところが、お客様の一人一人から、必ずお酒の返礼があるのです。

これには困りました。

祖父は何も助け船を出してくれないし、断るすべを知らない私は、しだいに酔ってききましたが、けっこう飲める質だったのかも知れません。

宴も盛り上がった頃、祖父が、「はっちゃん、なにか一つ皆さんのために唄ってさしあげなさい」と言われました。

かといって、流行歌など知らない私は、無理なことをおっしゃるものだと困りましたが、即座に軍校で覚えたての「荒城の月」を唄ってみせました。

すると、座のお客様は静かになり、唄い終わると、万座の拍手と賞め言葉が返ってきたのです。

気を良くしてしまった私は、もう一度皆さんにお酒をついで回りました。

すると、今度はお酒ばかりか、一人一人が和紙に五十銭銀貨を入れて花を作り、私に持たせてくれました。

そうこうするうち、私は酔っ払ってしまい、気が付いてみると翌朝の布団の中でした。

起き上がると、枕元には、お盆いっぱい膨らんだ花が置いてありました。

祝宴の二日目も、同様に左右一列ずつの宴席がこしらえてありました。  
ところが、私は今度ばかりは不思議な光景を目にしました。  
下座からみて左側の宴列には、ちゃんとした背広姿の紳士が並んおり、右側はシャツ姿あり、はんてん姿ありで、色もさまざまでした。  
祖父は、もう唄わせようとはしませんでしたし、私も今度はお酒を慎みながら、無事大役を果たし終わりました。  
三日目は、祖父の親戚一同が集まっての宴会が行なわれました。  
私は、祖父に気に入られていたためか、祖父のすぐ隣に座っていました。  
そこで、私は昨日のあまりに対照的な光景のわけが知りたいと思い、聞いてみたのです。

「お祖父さん。少し聞いてもいいでしょうか」

「おお、よう聞いた。何を教えてやろうかな」といつもの調子。  
こうして私は、次のような事情を知ったのです。  
左側に並んだ紳士たちは、祖父が仲人をして結ばれた家の主人たちで、右側の人々は、祖父が警察に掛け合って、罪に服する前に助け上げた犯罪人たちだったのです。

このころ、人の物を盗んだりする人というのは、今とは大違いで、たいがい生活に行き詰まった人でした。  
職がなかったり、あっても家族が養えなかったりして、仕方なく犯罪に及んだものでした。  
警官が彼らを捕まえると、傷害や殺人などのよほどの場合は別として、まず必ず祖父のところに連れてきたのです。  
そして、祖父が、「お引き受けしましょう」と言うと、警官は、「お世話になれよ」と言って、犯人に付けられた腰ひもを解いて引き渡したのです。  
というのも、長年こうした場合には、祖父が犯罪人の身柄を引き受けており、当面の生活費を与えるばかりか、職さえも祖父が身元保証人になって世話してこのかた、再び問題を起こしたためしかなかったからでした。  
祖父は、そんな彼らを普通の人と同等に扱っていたのです。

## 高田新四郎氏の成功

梁吉祖父は、毎日のように朝の決まった時間に外出し、夕方に帰ってきました。出掛ける時の出で立ちは、中折れ帽をかぶり、キセルなどの品々を入れた革袋を腰に下げ、ステッキを持った姿でした。私は、祖母と伯母がともに玄関に出て、見送りのあいさつをなさるのを見ながら、「いたいお祖父さんは、何をなさってるんだろう」と思っていました。そこで、また聞いてみたのです。

明治二十五年頃のことです。この地方に、ヤマヒという屋号の、高田新四郎さんという、畳表の間屋を商う人がいました。彼は、祖父からいろんな助言を受けて成功を収めた一人でした。助言というのは、主として、畳の材料の仕入や品質に関するものでしたが、次のような一風変わったものもありました。

あるとき、祖父は新四郎さんに時の総理大臣が変わったので、早々上京して総理大臣に会っておくよう助言しました。ところが、このとき新四郎さんは、少し前に亡くなった母親を祀るために、京都のとある仏壇屋の、間口一間もある、桐材とふんだんな金箔、漆で作られた仏壇を手に入れようと、脇目もふらずの交渉の最中でした。その値段は、三百八十円で、仏壇屋がびた一文まけられないと豪語するほどの、またとない絶品でした。  
( 当時の一円は今に直すと一万円以上の価値になりそうです )

事情を新四郎さんが話すと、祖父は、仏壇のほうはこちらに任せて、ぜひ総理大臣に会ってくるように勧めました。そこで彼は、そうすることにして旅立ったのでした。新四郎さんは、上京するとすぐ最高級のホテルをとって、早々に官邸にあてて、二人引きの人力車を走らせ、会ってもらおうとしましたが、総理大臣は多忙ということで会ってくれません。

次の日も、また次の日もそうでした。

しかし、一旦上京したかぎりは、必ず会わねばの一心で、まったく同じやり方で訪問を重ね、ついに十八日目に、わずかに三十分間だけ面会できました。

そして、満足して帰途に就いたのです。

祖父のほうは、新四郎さんが上京したその日に、京都に向かっていました。

そして、例の仏壇屋におもむくと、高田新四郎の代理で来た用向きを告げ、「三百八十円の仏壇は、今日私が値をつけるから、気に入らなかつたら売ってもらわんでもよろしい」と言って、間口一間の仏壇の前に立ったり座ったりして、しばし調べていました。

そして、店の主人を呼び、この仏壇は、この大きさの桐が何枚、金箔と漆がどれほど、工手間がいかほどで、店の利益をこれぐらいとして、都合八十円ではいかがかと逆見積もりしたといひます。

どうであったか、仏壇屋の主人は何も言わずに「どうぞこちらへ」と言って、奥座敷へ通して、よも山話をしだしました。

しばらくして、山海の珍味のご馳走が運ばれ、主人は祖父に、「どうぞ、召し上がってください」と言ひます。

祖父は、「私のご馳走をよばれに来たのではないから、どうぞ仏壇の話をしてくれませんか」と言ひますと、主人は、「仏壇を売って十一代目になりますが、これだけ正確に値を付けた人は初めてで、この値でここから備後まで持って行ってさしあげましょう」とのこと。

こうして、その日のうちに仏壇は船で川を下り、海路をたどって、四日かけて沼隈に着きました。

そこで祖父は、船での荷送り賃を一日一円とみて、都合八十四円を持って帰したといひます。

新四郎氏は戻ってみると、自分の屋敷の用意していた場所に、例の仏壇が納まっていたのでびっくりされたとか。

驚きは、そればかりではありません。

一年後、彼のもとに八万枚の畳の注文が入ったのです。

注文主は、北海道庁でした。

というのは、総理大臣が北海道庁におもむいた折、宿泊所や宴会場の畳があまりに黒ずんでいたのを、長官に何とかするよう指示を出したが、北海道には良いものがないという報告しか得られなかったそうです。

そこで、総理大臣の口を突いて、たまたま高田新四郎氏の名前が出たというのです。

こうしたことがあって、新四郎さんの名は一躍高まり、百万長者となりました。

そして、祖父の勧めで、土地を買い、大地主となりました。

彼は、祖父に事業の大番頭になってくれるよう頼みましたが、祖父は年令のこともあって断り、そのかわりたくさんある土地の見回りと管理をしようということになりました。このために、祖父は、毎日のように外出していたのです。

その合間をみて、かつて罪を犯した人たちの暮らしがうまく言っているかどうか、様子を見回っていたといえます。

行くたびに、芋や野菜を持って行ってやり、当面の金に困っているようなら、書き付けなしに金を貸したりもしておられました。

## 希代の知恵者

明治三十七、八年頃の話です。

村に小学校を建てる話が持ち上がり、どれぐらいの費用が掛かるかで、村議会は白熱しました。

どうしても、みな多額の費用を考えがちでした。

だが、祖父はきっぱりと、「五万円のできる」と言い切ったものだから、やりとりはごうごうと続き、とうとう大阪から工学博士の先生を呼んで、見積もってもらおうということになりました。

物々しい出迎えの中、工学博士の先生はやって来られ、三日のあいだ逗留するうちに、五万五千円の見積もりを出しました。

いよいよ最終決定するための村議会の当日になりましたが、待てど暮らせど先生は現われません。

旅館には、お迎えが走りました。

やがて戻ってきた者の報せで、先生は一通の書き置きを残して、日当も受け取らずに大阪に引き上げられてしまったことがわかりました。

書き置きには、「貴殿の村に、これほど正確な見積もりをする人がいるとは思わなかった。私は完成後に祝宴をはるための費用五千円を加えておいたのです」といった内容が記されていたそうです。

貧乏な村の予算では、五千円といえどもたいへんなところ。

祖父は、それを救った形になりました。

でも、この先生も誠実な人だったと、私は思います。

また、こんな話もあります。

その当時、天皇は現人神として崇敬されていました。

大正三年のことでした。

天皇の御神影（お写真）が初めて村にお越しになることになり、お出迎えのため、村長、村会議員、校長、そして祖父らは、人力車の列を仕立てて、駅に向かいました。

村長をはじめとするほとんどの人は、立派な礼装をして駅に立ったのです。

ところが、祖父だけは、木綿の紋付はかまに、わら草履という出で立ちでした。

それを見た一行が、はじめ小声でがやがや騒いでいましたが、ついにその格好を見とがめた村会議員の一人が、皆のしている前で、「いともかしこき御神影をお迎えするのに、そのみじめな格好は何ですか」とか言ったそうです。

ところが、祖父はすかさず、「皆さんの着ているものは、確かに立派そうに見えますが、結婚式はまだ良しとしても、葬式にも幾度となく着て出られたものではありませんまいか。しかし、私は、この日この時のために、上着はもちろん、ふんどしに至るまで、すべて新調してきておるのです」と答えたので、とたんに立場が逆転してしまいました。

はじめ、村長が御神影を受ける段取りになっていたものが、急遽、一番見すばらしい祖父に、予期せぬ村代表の受け取り役が任されることになってしまったのです。

とにかく、この時代の先生といわれる人たちは、物ごとの道理がわかり、自分の非はあっさり認め一途で素直なところがありました。

だから、人々の尊敬を集めることもできたのだらうと思います。

## 国会議員、井上角五郎先生

私は、梁吉祖父の御供として、見知らぬ家を何軒か付いて回ったことがあります。

私は、どの家でも玄関の外で待っていたのですが、中から聞こえる大きな声や笑い声の中に、「井上角五郎をどうかよろしく」と言う祖父の言葉が耳につきました。

私は、それにどういう意味があるのか聞いてみました。

祖父は、よしそれでは家に帰って話をしてやろうと言われ、いつもの長火鉢の前で、キセル煙草をくゆらせながら、次のような話をしてくれました。

梁吉祖父が寺子屋に通っていた頃の事です。

(だから、ここでは梁吉少年としましょう)

どのような経緯でか知りませんが、屋敷の離れに一畳の土間の付いた六畳間があって(それは、ハツノ祖母の時代にもあったとのこと)、そこに梁吉少年よりいくつか年上の「角やん」と呼ばれる少年がいました。

彼は、貧しい農家の五男坊ということぐらいしかわかっていません。

池田家では、そのとき四頭の牛を飼っており、角やんは、毎朝梁吉少年と共に、牛を二頭づつ手分けして裏山へ追い、草を食べさせ、夕方また共に連れて帰るという仕事をしていました。

梁吉少年は、受け持ちの牛を山に連れていくと、後の面倒は角やんに任せ、その足で寺子屋に向かい、それが終わると牛を連れ帰りに山に登ってくるという毎日だったのです。

角やんは、毎日寺子屋へ向かう梁吉少年の後ろ姿を見て、何とかして自分も本が読めるようになりたいと思い、そこである日角やんは、梁吉少年に頼みました。

「梁吉さん。頼みがあるんじゃ。この俺に、字を覚えてくれんかのう。そうしてくれたら、朝晩の牛追いは、全部自分でやるで、どうじゃ」と。

梁吉少年も、負担が減ることを喜び、「よし、そういうことなら、教えてやる」と承知しました。

梁吉少年は、地面の平坦なところに、木切れで平仮名とカタカナを、毎日いくらかづつ書いて教えたのです。

ところで、角やんは、月の一日と十五日が公休として与えられていました。今とは違い、その当時はどこでも奉公人に休暇を取らせることは、きわめて稀でした。角やんは、せっかくの骨休めの休暇でしたが、その日が来ると決まって早朝から腰弁当をして福山までの三里の道程を早駆けしました。そして、何をするかという、決まって福山駅前にある本屋に入るのです。そして、朝から晩まで、本屋の棚にある本を、憶えたての平仮名、カタカナと照らし合わせながら、きわめてゆっくりでしたが読破していったのです。そして、夕方、日が陰りかける頃になると、これまたいつものように「ああ、今日も買って帰るほどの本はなかったのう」と、捨て台詞を一つ残して出ていくのでした。本屋の主人は、また今日もか、と思いながらも、その熱意には多少の好感を持っていたに違いありません。文句一つ言いませんでした。

そんなことがどれほどか続いた頃のことでした。この本屋は、井上書店といましたが、その主人の娘がちょうど適齢期で、親が、親戚が、また知り合いが、代わる代わる、今度はどこの学校出の秀才だとか、どこの豪士の息子だとか言って、縁談を持ってきたのでしたが、娘は頑として受け付けません。業を煮やした主人はどうとう、「そんなにどれもこれも、よく見もせずには断り続けるというのは、誰か他に好きな人でもいるのかい」と娘に聞きますと、「はい」というではありませんか。呆気にとられて、「それは、どこのどなたなのかね」と聞きますと、「月の一日と十五日に来て、朝から晩まで本を読んで、何も買わずに帰る人」と答えたので、それがどこの誰かもわからないという理由で家の中は大騒ぎになりました。しかし、主人は、「よし、その人がどうおっしゃるかは知らないが、会って話をしてみよう」と、次の角やんの現われる日を、威儀を正して待ったのでした。

当時は、歌の文句にもあるように、情熱を以て書物を愛読する人が、若い娘の憧れだったのかも知れません。角やんにとっては、降って湧いた縁談それ自体もそうですが、本屋の若旦那として、だれ気かねなく本が読めることのほうが嬉しかったに違いありません。角やんは一も二もなく承諾しました。彼は、婿養子井上角五郎となり、読書の情熱は、なおも続いたといえます。そして、やがて村長になり、市長を務め、さらに政友会から国会議員として立ちました。

そして、私が御供して行ったのは、祖父が井上角五郎氏の第何期目かの立候補の選挙応援のため、有力者の家々（当時は、国税を納める人だけに参政権がありました）にお願いに上がっていたというわけなのです。

道理で、どの家も立派な造りをしていたわけで、祖父はこのため福山、尾道、呉、広島などを飛び回っていたのです。

梁吉祖父は、付け加えてこう言いました。

「昔は、わしのほうが角やんより偉かったんだが、今では逆に角やんのほうが偉くなってしもうて、たびたびわしは先生の腰ぎんちゃくとして、御供させてもろとるんじゃ」と。そこには、普段笑わない祖父の満面の笑みがありました。

## 保助大祖父

梁吉祖父は、もとは京都御所や東京の宮内庁に奉納する畳表の検査官を務めていました。京都御所に奉納する畳表の注文が勅命でなされたことがたびたびあり、そうしたときには全国から選りすぐりの職人が、松永の四宮神社に集まり、白装束に身を固めて、それぞれに畳表を結っていき、その中でいちばん良いものを奉納する習わしでした。通常の畳表であれば、一枚あたり六百匁で良いのですが、ご用達のものは、倍の一貫二百匁の密度が要求されました。

それを一日およそ三尺の割りで精魂込めて作り、出来上がったものを祖父が重さ、長さ、むら、傷の有無などを調べ、承認するのです。こうしてできた畳の一枚づつは、出荷されるときには、五色の色紙で飾られ、松永駅まで丁重に人力で運ばれ、菊の御紋の貨車に積まれて、京都へと向かったのです。それから少し後のことでした。

明治天皇直々のご要請で、畳表の出来ばえの良さに、検査官の親の顔が観たいということで、急遽大祖父にお召しがかかったのです。しかし、大祖父の保助さんは、そんな恐れ多いことはようしませんと辞退してしまったといいます。ところで、保助大祖父もたいへん世話好きな人徳者でした。人のためになることなら、頼まれもしなくともしました。

裏山の木の枝の伐採に、きこりが入っていったことを知った大祖父は、わざわざハシゴを担いで山に登り、何もなしでは危ないから、これを使うようにと頼んでみたり、家の前の灌漑用池の堤防の補修に人が出たと知ると、「腹が減ってはいくさも出来まい」と、弁当を家人に作らせ、持って行かせたりしました。乞食が、家の前に物ごいに現われることもあり、家人も気よく、一升舂にすりきりの米を渡そうとしましたが、大祖父はそればかりでは気に入らず、必ず山盛りにして持っていかせました。こんなふうだったので、家を訪れる乞食はひきを切らなかったそうです。

保助大祖父は、まんまるな顔で、額の真ん中に赤黒い疣があり、常々笑いを絶やさなかったもので、まるで大黒さんのようであったことを憶えています。

そして、一生涯病気らしい病気をしたことがなく、薬を口にすることがありませんでした。

あれは、大祖父が亡くなる二日前のことでした。

私は、何気なくこんなことを聞きました。

「お祖父さんは、薬はお飲みにならんですか」と。

すると、「薬というものは、たいそう苦いものだ」と聞いておるが、今まで一度も口にすることがない」とおっしゃいました。

そして二日後の夕方、このとき私は居合わせなかったのですが、大祖父は近くで宴会があって、夕食を食べて帰られると、家人に「寢床を引いてくれんか」とおっしゃって、隣の部屋で横になられました。

ややあって「今みなは、何をしてるね」と聞かれたので、大祖母さんが、「今私は、夕食を食べていて、ご飯の二膳目に箸をつけたところです」と答えると、「そうか、ゆっくりおあがんなさい」とおっしゃる。

が、その後すぐに「お婆さんや・・・」という声が聞こえたので行ってみると、すでに息がなかったといひます。

報せを聞いた梁吉祖父は、大至急、昵懇にしていた福山病院の院長先生を呼んで大祖父を観てもらいました。

先生はしばらくして、お悔やみを言うどころか、「この方は、寿命を積み切って亡くなられておるのであって、むしろ赤飯を作ってお祝いせにゃならんですよ」と言ひます。

それで、当日の夜は親族を呼び、お祝いのご飯を作るために赤はんでんを着て、一斗樽を鏡割りして杓で飲みつつ、みなで代わる代わる「とぎ米」をついたのでした。

保助大祖父、享年八十四歳。

この当時、八十才を超える長寿者はきわめて稀でした。

この伝えを聞いた隣村からも、大祖父にあやかりたいと主だった人々がやってきて、葬儀は大規模なものになりました。

出棺して、家の裏の墓場までのおよそ三町ある道程を、葬列は途切れることなしに進んでなお、最初に出た人が墓場に着いた頃には、まだかなりの人が会場で出発を待っている有様だったと、私は記憶しております。

また、話はだいぶ後になりますが、梁吉祖父は中風で倒れて、その一週間後に亡くなりました。

そのとき、かつて祖父から金を借りていた犯罪人たちの七割の人が、祖父の倒れたことを知るとすぐに金を返しにきました。

借用書などの書き付けは一切取っていませんでしたが、祖父の手帳に借り主とその額が書いてあったので、それがわかったのだそうです。

祖父はすでに、「たとえ金を返しにこなくとも、それは生活に困ってのゆえだから、決して催促をするな」と言い残しておられ、その遺言はきちんと果たされたのでした。

ハツノ祖母は平成六年四月四日に天界へと旅立ちました。

享年九十二歳でした。



奥付



## 奥付

はつの祖母の思い出

<https://puboo.jp/book/104535>

著者：yae-mon

著者プロフィール：<https://puboo.jp/users/yae-mon/profile>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/104535>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/104535>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<https://puboo.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ

---

はつの祖母の思い出

---

著 森野奥人

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---